

陳舜臣さんを語る会通信

NO.57 Jan. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」 編集委員

発行日 2022年1月1日

講談社『陳舜臣全集 20』収録、『失われた背景』と『月をのせた海』

『失われた背景』の初出は、『週刊サンケイ』1972年3月3日号～73年2月16日号です。手もとの中公文庫版で、600ページを超える本格的な推理小説ですが、陳舜臣作品の中で知名度はそう高くありません。どうしてでしょう。

ちなみに、単行本は、1973年3月にサンケイ新聞社から発行されています。表紙画像を本号2ページに載せています。また、講談社『陳舜臣全集第二十巻』に「月をのせた海」とともに収録されています。（編集委員 橘雄三）



中公文庫版表紙

中公文庫版のキャッチコピー

意識を取り戻すと殺人事件の容疑者に仕立てられていた……。

「東方文明研究所」東京支部に勤務する程紀銘は、逃避行を続けながら、三人の同僚とともに仕掛けられた罠の背後に潜む人物を追う。

連続殺人事件、書画骨董の贋造、日中戦争勃発当時の愛憎の人間関係、謎は謎へと連なりあって、事件は思いがけぬ方向へと展開する傑作長編推理。

中公文庫版『失われた背景』巻末、権田萬治氏の「解説」より抜粋引用
小見出し及び傍線は編集委員の加筆

陳舜臣さんは、まず推理作家として出発

昭和三十六年長編推理小説『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞して、文壇にデビュー。四十四年には短篇「青玉獅子香炉」で直木賞、さらに四十五年には、『玉嶺よふたたび』と『孔雀の道』で推理作家協会賞を受賞している。

その意味では、氏はまず推理作家として出発して文壇的地位を確立、その後、さまざまな分野で多彩な才能を発揮したということもできるだろう。

陳舜臣さんの推理小説の優れた特質

氏は、「推理小説私観」というエッセイで、次のように語っている。

「犯人が誰であるとか、どんなふうに関わるかといった場面は、推理小説であるからには、最初から決定していなくてはならない。だが、その組み立ては、できるだけ必要不可欠の細い筋にとどめておき、登場人物の分岐するものを、受け容れるスペースを残しておくべきであろう」

つまり、氏は、論理による謎解きという推理小説の定型を踏まえながら、できるかぎり登場人物の人生の軌跡を作品の中に生き生きと分泌させようという文学的な立場に立っているのである。

『失われた背景』には、陶展文のような推理能力豊かな個性派のアマチュア名探

「失われた背景」が収録されている講談社『陳舜臣全集第二十巻』巻頭写真
一九七六年七月神戸にて 提供・文藝春秋

数あるポートレイトのなかでも、格好いい一枚



偵は登場しない。

いや、主として探偵役を務める程紀銘は、西野錠助殺しの容疑者に仕立てられそうになり、逃避行をしながら調査を続けるので、本格推理の探偵役というより、ウィリアム・アイリッシュ風のサスペンス小説の主人公に近い。

この程もまた完全な探偵役ではなく、最後には、周や広橋や律子までが真犯人を当てようと推理ゲームに加わるのだ。

登場人物の内、特に犯人に仕立てられそうになり、逃避行を続けながら調査をするという役を演じる程紀銘のキャラクターが実にシーチャーで楽しいのである。

そういう小説的な面白さもこの作品の大きな魅力といえるだろう。

補足 ■ウィリアム・アイリッシュ

一九四二年の『裏窓』は、アルフレッド・ヒッチコック監督により映画化され有名。

『失われた背景』登場人物 & 内容紹介ほか

主な登場人物紹介

- 張天統（ちやんてんどう） 六十八歳。弟たちを率いて実業界で活躍。とくに海運業では、チャン・ブラザーズの名で知られる。本拠地は香港。また、東方文明研究所の設立を進めている。同研究所のメンバー、程紀銘、周建平、舟岡律子は、遣日考察班として、同じ船で香港から日本へ
- 程紀銘（ていきめい） 東方文明研究所の所員、メンバーで一ばん年長。同研究所東京支部のオフィスにする建物を物色。祖父・程沛儀（ていはいぎ）將軍に心酔。その死の謎解明が念願。毘（び）にかけられ【第二の殺人事件】の容疑者に。寺内吾郎という偽名で逃避行
- 一九三七年七月、盧溝橋事件を契機に日中は全面戦争に突入する。十二月の南京事件を経て、蒋介石国民政府は重慶に遷る。この時期、重慶の国民政府に対抗する親日政府の首班に、軍閥抗争はなやかなりし頃のスター・程沛儀をかつぎだそうとする勢力があった。そんな情勢の中で、程沛儀は急死する。死の真相は？
- 周建平（しゅうけんぺい） サンフランシスコ育ちの中国人、アメリカ国籍。父は周大章。祖父は天才的な贗作家。舟岡律子とイギリスの大学の研究室で知り合う。日本学を専攻。張天統から東方文明研究所の設立準備を委嘱されている。研究所のメンバーとして舟岡律子を誘う
- 舟岡律子（ふなおか りつこ） 一九四五年生まれ。東京の大学の大学院在学中にイギリスの大学に留学。専攻は史学
- 広橋清志（ひろはし せいし） 舟岡律子の大学の先輩。優秀な学究であったが、弟妹を養うため、高校の教師に。その後、教師も辞め、学習塾を開いて

いる。舟岡律子から東方文明研究所の研究者にと誘われる

●小杉順治（こすぎ じゆんぢ） チャン・ブラザーズの日本総支配人。神戸の御影に邸

●廖竜昇（りょうりゅうしやう） 張天統から派遣され日本に。美術関係の専門家というふれこみ。もと周家の番頭。【第一の殺人事件】の被害者。小杉邸の庭の池で死体となって発見される

●西野錠介（しのだいけい） お茶の水に住む。かつて、アナキストとして知られた東大生。検挙され、獄中で右翼に転向。その後、大陸に渡り、終戦直後、大きな財を持って引き揚げてきたといわれている。岡本素雲の「白風会」を援助。庭に新しいビルを建築。そのビルに、東方文明研究所東京支部が入ることに。【第二の殺人事件】の被害者。寝室で、刃物で殺される

●岡本素雲（おかもと すうん） 書家。「白風会」主宰

●トシ子（としこ） 花売り娘。寺内吾郎（程紀銘）と十万で専属契約。情報提供者。情報の一つ、マキという名の賢い旧友の話

●西野純（しのだいじゆん） 西野錠介の一人息子、画家志望

●三村恵子（しみむけいこ） 西野純と同棲を経て結婚

●秋本進太郎（あきもと しんたろう） 京都春秋堂主人

●安原茂子（やすはら しげこ） 秋本進太郎の孫。周建平と知り合い、二人の仲は進展

●鶴岡（つるおか） 古美術商・鶴岡商会店主。元憲兵将校



サンケイ新聞社版表紙

『失われた背景』補足（一）
タイトルの意味は？

『失われた背景』って、どういう意味？ 特に推理小説のタイトルはわかりにくいものが多い。いままで取り上げてきた陳作品でも、『枯草の根』『崩れた直線』『夜の歯車』『炎に絵を』、みなそうだ。わかりづらいところがミステリーらしいのかもしれない。でも、『枯草の根』のように、作品のなかで、きちつと説明されるものもある（本通信第43号参照）。

『失われた背景』には、特に、説明・ヒントらしき記述はない。何を言っているのだろうか？ 「背景」といえば、事件の背景、時代背景、登場人物の背景などなどあるが、まず、事件の背景を想像する。登場人物の推理・憶測、伝聞でストーリーは進展するが、それが外れ、失われていって、意外な展開をする。というのがあったら、似たり寄ったり、推理小説といえは、そんなものだし。

『失われた背景』補足（二）
「紅蘭記」の章は出色

『失われた背景』は、廖竜章の、庭の池での死体発見、西野錠助の惨殺事件、程將軍の死の真相、贗作にまつわる謎など、いくつもの謎が交錯して複雑なストーリーになっていきます。

この作品は二十の章からなるが、その十六番目、「紅蘭記」は、終盤に近づき、絡み合った複雑なストーリーをほぐしていく重要な章になっています。

周建平が鶴岡商会の主人に招かれ店を訪問、安原茂子と一緒に、日中戦争初期、鶴岡が憲兵将校だった北京時代の話を聞くくだりです。話には、まず程沛儀將軍、その妾・紅蘭、そして、紅蘭が未だ芸者だった頃から本気で惚れていた青年が登場。この三角関係の顛末に、廖竜昇が関わり、さらに張天統から、小杉順治、西野錠助の名まで出てきます。

陳舜臣さんの小説で、『夢さめの坂』など、作中時間から遡り、戦時中の中国に時代背景が移る作品は多い。

『失われた背景』、初出は『週刊サンケイ』（1972年3月3日号～73年2月16日号）

『週刊サンケイ』表紙

一九七二年五月五日号。表紙は人間国宝・尾上松緑。定価百円。



同号、目次

今週の表紙 尾上松緑
絵・和田誠／構成・長友啓典

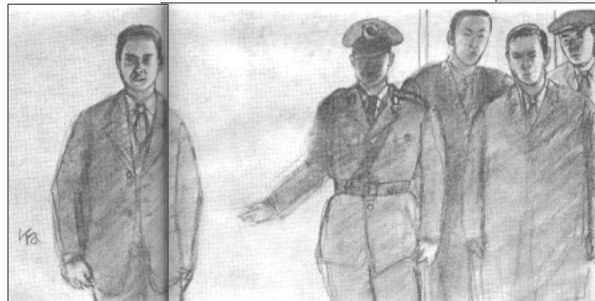
大いなる変身 黒岩重吾… 114
失われた背景 陳舜臣… 68
忍法かげろう斬り 早乙女貢… 56

連載小説
ワールド・ストーリー／名言迷言
情報コーナー
ブックダイジェスト
とかくこの世は…
占い／碁・将棋
ボウリング／日本航空対パンアメリカン航空
インサイド
ベスト10／変身願望 28 告知板
☆マンガ
コナラその他課／東海林さだお
一宿一飯／モンキー・パンチ
あひるヶ丘77／小島功

◆サンケイギャラリー／ジャン・コクトー 84
8892102 15398104 87909994 42 56 68 114

黒岩重吾、早乙女貢に並んで、陳舜臣さんの名が見える。当時の文壇のようすがうかがえる。

同号、「失われた背景」第十二回連載頁



連載頁、題字「失われた背景」は陳舜臣さんの字。絵は風間完。

最初の絵は、研究所オフィスの家主、西野錠助が殺されている場面。まだ、犯人がわからないから顔がない。上は、五人の男（一人は制服の警察官）が研究所オフィスに入ってきた場面。

『失われた背景』補足(三)

陳舜臣さんにとって屈辱の行事、指紋押捺

東方文明研究所オフィスの家主・西野錠助が殺され、程紀銘に容疑がかかりそうになる場面、現場に残された指紋に話が及びます。
『失われた背景』から引用します。

日本人の場合、前料があるとか、なにか警察で調書をとられたとか、そんな特殊なケースを除いて指紋をとられるようなことはない。

ところが、外国人は、外交関係者を除いて、一人のこらず指紋をとられている。外国人登録で、それが義務づけられているのだ。だから、もし程紀銘の指紋が現場から検出されたとすれば、すぐに外人登録の指紋と照合されるわけである。

(中公文庫版 p.130)

外国人登録は陳舜臣さんご自身にとっても、三年に一度やってくる、屈辱の行事だったのです。早川書房版『割れる』『あとがき』から引用します。

この秋はさわやかで、私のからだの調子もよかった。故障といえば、ただ指のさがすこし荒れたぐらいである。

この作品の構想を練りはじめたころ、外人登録の切りかえがあった。われわれ外国人は、三年に一度、登録を更新しなければならぬ。そのときに、新しい写真と指紋をとられる。神戸の生田区役所では、指紋用インキを拭くために、ペンジンを浸した脱脂綿をくれた。私は皮膚が弱いので、ペンジンに負けて指のさが荒れたというわけだ。(傍線は編集委員)

■指紋押捺は、特別永住者については一九九三年から免除。

美しい女性の黠智(かっち 悪賢い知恵) をえがこうとした『月をのせた海』

『月をのせた海』は処女作『枯草の根』から三年後の1964年に発表された作品です。書き下ろしで東都書房からの出版ですが、いま、この本は、各地の図書館にもネットでも見つかりません。手もとにあるのは、徳間文庫版『月をのせた海』(1983)ですが、これさえ、古本市場には少ないようで、送料込みで1274円しました。

「失われた背景」とともに、講談社『陳舜臣全集20』に収録されていますので、陳舜臣作品の中でも、それなりに重要な作品と思い取り上げました。文庫本で200ページほどの作品です。(編集委員 橘雄三)

徳間文庫版 キャッチコピー

秘められた過去に^{さいな}苛まれる二人の女

黒川常彦の亡父が上海で経営していた会社の番頭・小西耕造が絞殺された。警察が嫌疑をかけたのは、常彦の恋人・小夜子であった。彼女は常彦との結婚を小西に反対されていたのだ。一方、常彦はアパートの名陶展の目録を見て、出品された壺が亡父の妾が大切にしていた物だったことを知る。現在は銀行重役夫人となった女性と小西を結びつける糸を黒川は探っていく……。

秘められた過去の非情を描く本格推理！



徳間文庫版表紙

主な登場人物紹介 ほか

作中時間は一九六〇年代前半。

●黒川常彦 二十八歳。久保田商事神戸支店勤務。アパート朝日荘に住む。黒川家は、祖父の代から上海で商売。常彦は上海黒川洋行の全盛時代に生まれる。小学校に上がる頃、母と一緒に帰国。数年経って、終戦で、父も引き揚げてくる。中学へ上がるころ母

を、高三のとき父を亡くす。両親から莫大な遺産を受け継ぐ

●小西耕造 アパート朝日荘の主人。つれ合いを数年前に亡くし一人住まい。元上海黒川洋行の番頭。黒川常彦と一緒に黒川洋行を再興したいという夢を持ち、不動産を含め資金面の準備もしている。「黒川洋行再興の軍資金にと思って、ずいぶん因業なこともやりましたわいな」。自宅で死体が発見され、犯人捜しと登場人物の生い立ち、経歴描写でストーリーは展開。

●浜名小夜子 戦災孤児。親族のあいだをたらい回しされた。美貌を武器に、現在の境遇から脱出したいという夢をもつ。予備校の事務員。中山手のアパートに住む。黒川の恋人

●須方範子 四十歳を過ぎている。夫・須方兼太郎は関西銀行の重役。京都岡崎の豪邸に住む。東京の丁商事の事務員をしていたとき、須方に見初められ結婚。もと、上海黒川洋行の経営者・黒川庸治の妾。大和川のほとり、水呑百姓の家に生まれる。十五歳で長崎の芸者屋に引き取られる。十七歳で落籍され、上海に渡る

●樋口研助 須方家の運転手。もと、丁商事勤務。当時、須方範子の上役

蒼海の壺 ■ 浜名小夜子は百貨店の『中国名陶展』で、中国宋代の、球状に近い青色の壺が気に入った。壺の口に近いあたりは淡い青で、下にゆくにつれて、色が濃くなっている。

この壺が事件に大きくかかわってくる。

『月をのせた海』、タイトルの意味は？

『月をのせた海』、これもわかりにくいタイトルです。作品から、ヒントとなる記述を拾ってみます。

浜名小夜子が百貨店で開催の『中国名陶展』展示の「蒼海の壺」と出会うくだりです。

線はやはり波をあらわしているのだろう。そして、青は海の色だ。だんだん濃くなっているのは海の深まりを暗示しているのかもしれない。

小夜子は、じつとその壺をみつめた。

会場の壁にとりつけた電球が、壺の表面にうつっている。それは、海にうかぶ月影のようにはみえた。(徳間文庫版 p.16)

もう一ヶ所あげます。

場面をいうとネタバレになるので、ピンポイントで記述します。

黠んだ海に、月影だけがうかんでいる。さざ波に、月影は歪んでいた。「蒼海の壺の表面に、ぼつりと一つだけうつっていた、あのまゝい時計の文字盤のように。」

(徳間文庫版 p.205)

賢明な読者の皆さまは、すでに、タイトルの意味がわかりになったかも知れません。



壺はイメージ